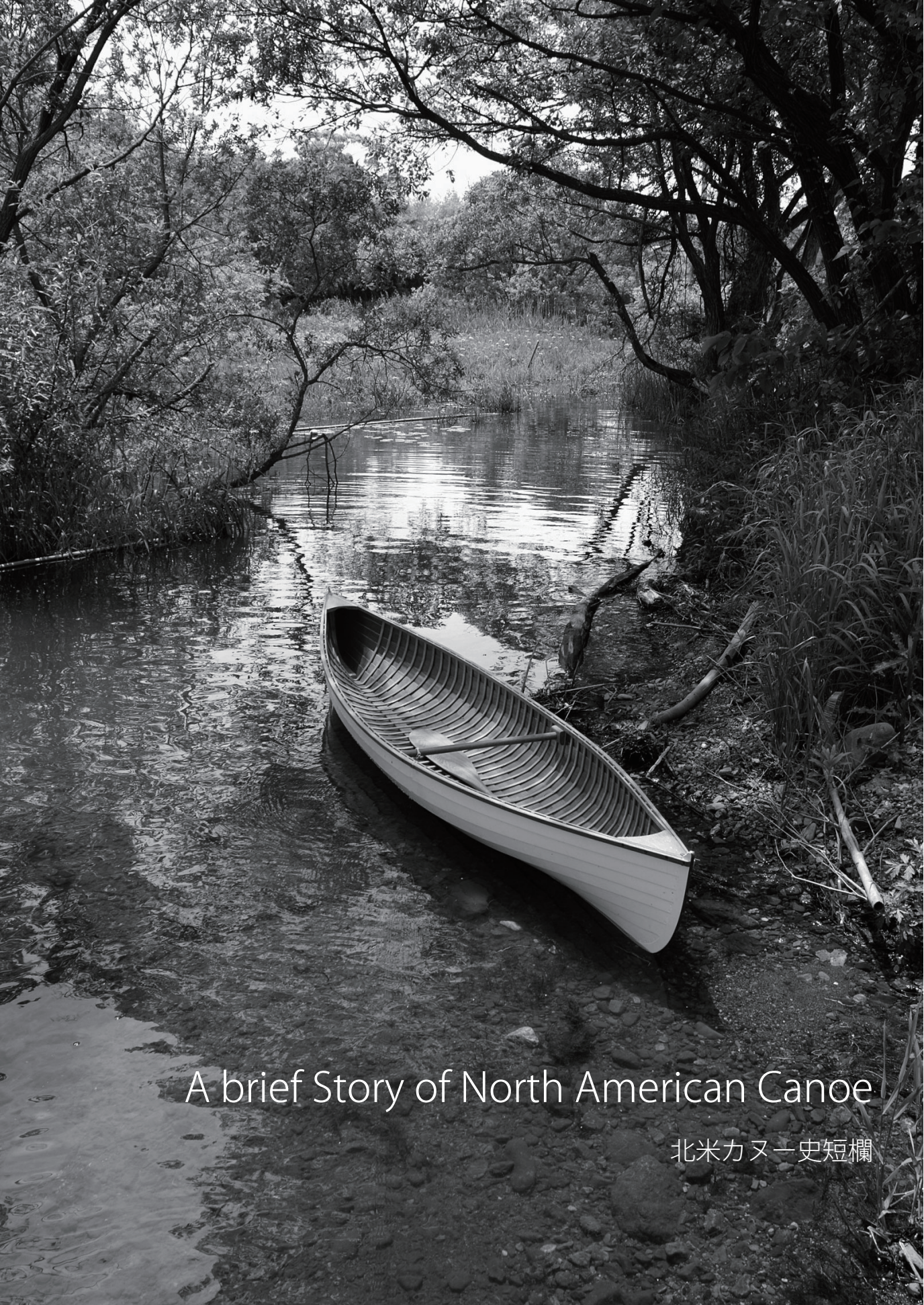


# A brief Story of North American Canoe

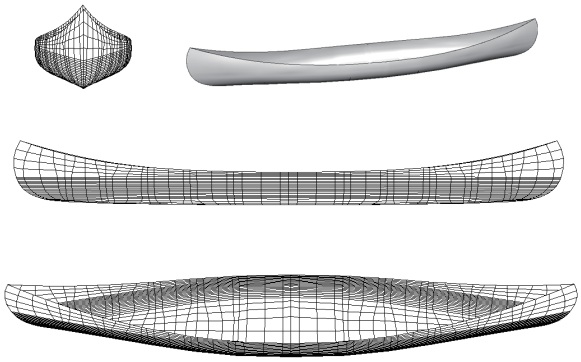
北米カヌー史短欄

カヌーの源流をたどるとアメリカインディアンの発明に行き着きます。アベナキインディアンは湖や川の移動用に樺の樹皮を木のフレームに貼った軽い船を作りました。バーチバークカヌーと呼ばれているそれは白人の手に依って樹皮をキャンバスに置き換えられ、ウッドアンドキャンバスカヌーと作り変えられました。今日見かけるプラスティクや新素材のカヌーもその形をそのままに受け継いでいます。
ところでカヌーにはもう一つの流れがありました。西洋の船を源流としキールとリブの骨格に薄い外板を張り合わせて作った種類のものです。それはキャンバスカヌーが出現しマーケットを制覇して行くに連れ衰退していったのですが、初期にはレジャーボートとして一番の位置を占めていました。

１９世紀末は工業、社会にとても大きな変化があった時代です。動力機械の発達は力の要る仕事を容易くしました。手持ちの電気ドリルはまだありませんが、動力を使ったバンドソウは造船所で広く使われていました。社会では裕福な中間層が生まれ、レジャーを愉しむ事が一般的になりました。ボートも実用一辺倒の物から、顧客を意識して美しさをより重視するようになってきます。「デザイン」と言う概念が小型ボートの世界に入ってきたのはこの頃です。レジャー用のボートの登場は実用一択だったボートの種類を大幅に広げました。
ビクトリアンの時代です。婚約のプレゼントにカヌーは欠かせない物でした。

一部の裕福層から始まったレジャーブームの初期は探検の時代でした、アメリカにはまだ誰も入った事のない峡谷や湖は幾つも残っており、当時の山岳紀行誌であるフォレストアンドストリーム誌はそのような探検の記事で埋まっていました。セイリングカヌーを駆使して湖から湖へ、彼らは奥地へと入って行きました。風があればセイルで走り、ないときはパドルに頼ります。セイリングカヌーは軽量化されたヨットで多くの荷物を積んでの長距離旅行に適していました。またそれは湖のスポーツの花形で、毎年様々の大会が開かれていました。事実、自転車が出てくるまでスピードを愉しむ最速の乗り物だったのです。

そしてヘンリーラシュトンのような天才的な作家が出てきます。
フォレストアンドストリーム誌の看板ライターで、アウトドアーという言葉を広めるきっかけを作ったネスマック（ジョージワシントンシアーズ）はラシュトンが作ったサリーガンプという名の１０フィートあまりのカヌーを用いて３０００マイルもの探検航海を成功させます。その記事はラシュトンの名声を一気に広めました。たった 5.7 キロしかないカヌーがネスマックと多くの荷物を積み何の問題もなくこの航海を果たしたのです。後にサリーガンプはスミソニアン博物館の所蔵となり、いまはアディロンダックミュージアムに移されて実物を見る事が出来ます。ラシュトンはニューヨーク州カントン市に工房を構え多くの優秀な職人を雇い入れ、一人乗りのカヌーから湖のセイルボート、当時まだ生まれたばかりの電気ボート等様々の美しい小艇を制作しました。



一方、ウッドアンドキャンバスカヌーはアメリカインディアンのカヌーにその起源を持っています。先住民達は木作りのフレームにバーチ ( カバの木）の木皮を括り付けて船を作り、トネリコの木で櫂を作り湖や川を行き来していました。
新しく入ってきた西洋人達はこの小さな舟に目をつけました。軽いカヌーは陸を持ち運ぶ事も出来て、小さな舟にも関わらず一度水面に出れば大きな荷物を運ぶが出来ます。最初彼らはインディアンからそれを買って、あるいは製法を教えてもらって使っていました。

やがて白人達は木の皮をキャンバスに変えて作り始め、新しい製法が確立されます。今日見かけるカヌーの始祖ウッドアンドキャンバスカヌーの始まりです。それはキール（竜骨）とリブ（肋材）を元にした西洋の船とは全く違った作りで、両側のガンネル（舷縁）から曲げ吊るされた多くのリブが舟の構造を作りキールは在りません。

インディアンカヌーの源流であるペノベスコット川を抱えたメイン州周辺には幾つもの知られた工房が作られました。E.M.White や Oldtown の名は今でも知られています。Oldtown は現在もカヌーを作り続けてこの種のカヌーでは最も知られたメーカーとなっています。

カナダではチェスナットカヌーが少し遅れて参入してきました。彼らはオールドタウンの職人を引き抜き雇入れ、一番最初に製法特許を獲得し設備の行き届いた工場で大量にカヌーを製造しました。地理的な条件からもカヌーの需要が多くあったカナダでは数多くの工房が現れ、それぞれの製作技法を競い合いました。この種類のカヌーがカナディアンカヌーとも呼ばれる所以です。当時は様々な手法でカヌーが作られました。伝統的なラプストレーキ、細い木を積み重ねていくストリッププランキング、ウッドアンドキャンバス、結局工程が少なくコストも下げられるキャンバスカヌーが市場を制しました。

キャンバスカヌーをメジャーにしたのはその製法の簡単さです。初めに木型さえ用意しておけば、あとはただ蒸したリブ（肋材）を曲げ付け外板を張っていくだけです、外板はずべて同じ幅のものを組み合わせて張るだけなので、従来の西洋の船のように一枚一枚形に合わせて切り合わせる手間はありません。そして最後にキャンバスを張って防水材を塗るのですから、水の漏れる心配は無用、髪の毛一本の隙間も許さない木工の技術は不要です。熟練した職人は必要としません。それはちょうど当時の主流だった大規模工場でのマニュファクチャーに適した手法でもありました。プラスティク素材が主流になるつい最近までキャンバスカヌーはレジャーの主役でした。

ラシュトンもキャンバスカヌーを作りました。インディアンガールと名付けられたそれはベストセラーとなり彼の工房の財政的危機を救いました。美しく曲げられた舷側のラインはラシュトンならではのデザインです。でも彼が本当に愛していたのは伝統的なラプストレーキ技法のカヌーでした。ラプストレーキのカヌーは手間がかかるのでどうしても値段が高くなります。熟練の職人を集めるのは大変な苦労ですし、材料のホワイトシダーのいい木を手に入れるのも簡単ではありません。それでもその美しさに魅せられて作り続ける工房や職人はいました。ラシュトンもその一人でした。でもやがてラシュトンがなくなり、跡を継いだ彼の息子が 1917 年に会社を閉めた後、ラプストレーキのカヌーは大きな工房の定番として作られる事はなくなって行きました。

-- ラプストレーキとはストレイク ( 外板）をラップ（重ね合わせる）事から名付けられた技法で、クリンカーとも呼ばれています。外板を留めるときに釘を使ってクリンチ（かしめ留める）するところからくる名前です。